

## 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について

粕谷 貴志\* 菅原 正和\*\* 河村 茂雄\*\*

(2000年1月7日受理)

Takashi KASUYA, Masakazu SUGAWARA, Shigeo KAWAMURA

The Relationship Between Internal Working Model and Social Skills in  
Junior High School Students.

### 1 はじめに

不登校や学校不適応の問題は、非常に大きな問題となっている。文部省の学校基本調査(1999)によると年間30日以上欠席した「不登校」の生徒数は、生徒数の減少にもかかわらず増え続け、平成10年度間の中学校における不登校の生徒数は約10万人を超えており、前年度より1万7千人あまり増加している状況である。「心の教育」がいわれ、スクールカウンセラーの充実など対応が急がれているが、決め手は見つかっていないのが現状である。そのような状況の中で、教育現場の教師や研究者からは、学校不適応から不登校に至る一つの要因として社会性の欠如や対人関係形成能力、ソーシャル・スキルの未熟さが指摘されている。本論文では、アタッチメント理論の観点から、対人行動に影響すると考えられる内的作業モデルの検討を行い、そのタイプとソーシャル・スキルとの関わりを検討した。

### 2 問題と目的

Bowlby (Bowlby, J. 1969, 1973, 1980) は、アタッチメント理論の中で、愛着に関する表象モデルとして内的作業モデル (internal working model) の概念を提唱している。内的作業モデルとは、他者と自己の関係について各個人が持つ認知的枠組みであり、自分は愛され助力してもらえる存在なのか、他者あるいは自分が所属する対人関係は、自分の求めにいかに応じてくれるのかといったことなどに関する表象モデルである。この内的作業モデルは、発達に伴って出会うさまざまな愛着対象との間での、アタッチメントに関連した出来事を要素として形成され、人は、そのモデルを適宜活用することによって、外界

---

\* 岩手県松尾村立松尾中学校

\*\* 岩手大学教育学部

からの情報を処理し、行動プランを立てるものと考えられている。内的作業モデルの個人差によって、情報の解釈は異なるため、行動プランに違いが出てくることになる。

Ainsworthら (Ainsworth, M. D. S. et al. 1978) は、この愛着の個人差を実験により把握する方法として、ストレンジ・シチュエーション法を考案し、乳幼児期の愛着のパターンを分類した。それによれば、子どもを新奇な状況の中で親と分離してストレスを与え、分離や再会の場面における、子どもの様子によって、愛着のパターンを3つのタイプに分類している。

Aタイプ(回避型)：親との分離に際し、泣いたり混乱を示すことがほとんどない。再会時には、親から目をそらしたり、明らかに親を避けようとする行動が見られる。親を安全基地として探索を行うことがほとんど見られない。

Bタイプ(安定型) 分離時に多少の泣きや混乱を示すが、親との再会時には積極的に身体的接触を求め、容易に静穏化する。親との分離時にも実験者からの慰めを受け入れることができ、親を活動拠点として積極的に探索行動を行うことができる。

Cタイプ(抵抗・アンビバレント型)：分離時に非常に強い不安や混乱を示す。再会時には、親に強く身体接触を求めていくが、その一方で親に対して怒りを示し、激しくたたいたりする。近接と抵抗というアンビバレントな反応を示す。行動が不安定で、用心深く、親を安全基地として探索行動をすることがあまりできない。

Bowlby によれば、この愛着対象と自己に関する相補的な内的作業モデルは、乳幼児期、児童期、という未成熟な時期に徐々に形成され、その後、加齢とともに可塑性を減じ、安定性を増していくものと考えられている。また、内的作業モデルの個人的差異が、その後の対人関係のスタイルやパーソナリティの形成に発展していくと考えられている。

戸田弘二は(1988)は、このアタッチメント理論を青年期にも適用し、青年の基本的な対人態度の特徴をアタッチメントの問題から捉えていくことを試み、内的作業モデル尺度を作成した。それによれば、早期の愛着スタイルと同様の「avoidant (回避型)」、 「secure (安定型)」、 「anxious / ambivalent (抵抗・アンビバレント型)」の3つのタイプが見出され、青年期においても乳幼児期から連続すると考えられる愛着スタイルの存在が実証された。

本研究では、中学生の内的作業モデルのタイプを測定し、中学生の時期の内的作業モデルの特徴を検討するとともに、内的作業モデルの特徴とソーシャル・スキルとの関わりを検討し、アタッチメント理論の観点からソーシャル・スキルの形成、実行を捉え、中学生の学校不適応への介入の視点を得ることを目的とした。

### 3 方 法

調査対象：岩手県内の公立中学校3校の1学年から3学年までの10学級の生徒277人が調査対象であった (Table 1)。

調査時期：1998年12月

手 続：岩手県内、内陸都市部M市および周辺市町村、内陸僻地I町、沿岸僻地T村にある中学校に対して調査の依頼をし、調査への協力の承諾を得られた3校に調査を実施した。

## 調査実施地域

岩手県内の内陸部、沿岸部、内陸北部

## 調査対象中学校の所在地域と学校規模

M中学校	内陸部T村	学級数	7
T中学校	沿岸部T村	学級数	6
I中学校	内陸北部I町	学級数	3

## 調査対象学級数と人数

## 10学級

M中学校	2年生1学級	(34)
T中学校	1年生2学級、2年生2学級、3年生2学級	(189)
I中学校	1年生1学級、2年生1学級、3年生1学級	(54)
		(合計277)

## 有効回答数 (有効回答率90.3%)

M中学校	2年生2学級	(31)
T中学校	1年生2学級、2年生2学級、3年生2学級	(168)
I中学校	1年生1学級、2年生1学級、3年生1学級	(51)
		(合計250)

## 学年別

1年生	66	(T中学校-46、I中学校-20)
2年生	105	(M中学校-31、T中学校-58、I中学校-16)
3年生	79	(T中学校-64、I中学校-15)
全学年合計	250	(M中学校-31、T中学校-168、I中学校-51)

## 性別

男子	110
女子	140
合計	250

Table 1 サンプルの属性

質問紙は、内的作業モデル尺度 (詫摩・戸田, 1988) およびソーシャル・スキル尺度-KiSS-18 (菊池章夫, 1988) のそれぞれを中学生用に修正したものを使用した。また、同時に母親 (または父親) のイメージを形容詞により構成された質問項目でこたえる尺度を使用した。

調査の実施は学級担任に依頼した。本研究者が事前に質問紙を調査対象の学校の担当教諭に届け、内容や実施手順を説明した。その際、調査実施前に対象生徒に対して、本調査が学校の成績や本人の評価に一切関係がないこと、調査用紙を担任等、学校の先生が見ることはないことを説明することも依頼した。また、質問紙への回答は無記名とし、念のため生徒に個別に封筒を渡してその場で封をして提出するようにした。

## 4 結果と考察

## 中学生の内的作業モデルの分析

内的作業モデル尺度の結果に因子分析を実施したところ、3因子が見出された。さらに、内部相関の高かった2項目とIT相関の低かった1項目を除外して、15項目で再度因子分析を行った結果、「secure」、「avoidant」、「ambivalent」の3因子構造が確認された。この結果は、詫摩・戸田（1988）の結果と同様であった（Table 2）。

項 目	secure因子	anxious因子	avoidant因子
・私は知り合い（友だち）ができやすいほうだ。	.839	-.070	-.011
・私はすぐに人と親しくなるほうだ。	.835	-.059	.074
・初めてあった人とでもうまくやっていける自信がある。	.788	-.178	.068
・私は人に好かれやすい性質だと思う。	.677	-.242	-.029
・気楽に頼ったり頼られたりすることができる。	.629	.075	-.217
・あまり自分に自信を持ってないほうである。	-.062	.754	.119
・人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。	-.045	.744	.166
・自分を信用できないことがよくある。	-.021	.716	.181
・ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。	-.155	.686	-.079
・私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき友だちからうとまれて（いやがられて）しまう。	-.091	.491	-.005
・どんなに親しいあいだがらであろうと、あまりなれなれない態度をとられるとイヤになってしまう。	-.073	-.081	.769
・あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。	-.090	.135	.751
・人に頼るのは好きではない。	-.052	.136	.558
・人は全般的には信用できないと思う。	-.063	.240	.547
・私は人に頼らなくても、自分一人で十分うまくやって行けると思う。	.198	-.064	.464
固有値	3.57	2.33	1.76
寄与率(%)	23.8	15.5	11.7

Table 2 内的作業モデル尺度のバリマックス回転後の因子マトリックス

また、内的作業モデルのタイプと母親（または、父親）に対するイメージとの間の相関を検討した結果、secure得点は、「人の良い」、「受け入れてくれる」、「尊敬できる」、「あたたかい」、「頼りになる」、「安心できる」などのイメージと有意な ( $p < .01$ ) 正の相関が見られた。一方、anxious得点は、「うるさい」、「いちいち口をはさむ」、「おしつけがましい」、「矛盾した（ちぐはぐな）」などのイメージと有意な ( $p < .01$ ) 正の相関が見ら

れた。また、avoidant得点は、「拒否的な」、「疑い深い」、「無責任な」などのイメージと有意な ( $p < .01$ ) 正の相関が見られた (Table 3)。これらの傾向は、早期に各愛着スタイルを示す乳幼児の養育者の特徴と類似している。

項 目	secure	anxious	avoidant
頼りになる	.301**	-.148*	
尊敬できる	.289**		
感受性の豊かな	.253**	-.176**	
人の良い	.239**		
知的な	.236**		
あたたかい	.232**		
安心できる	.220**		
思いやりのある	.220**		
安全な	.219**		
正しい	.218**		
受け入れてくれる	.216**		-.134*
うるさい		.321**	
いちいち口をはさむ		.315**	
おしつげがましい	-.151*	.299**	.188**
矛盾した (ちぐはぐな)		.286**	.175**
拒否的な		.267**	.184**
不公平な		.221**	
あれこれしてほしいことばかりいう		.206**	
疑い深い		.184**	.236**
無責任な			.219**

\*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$

Table 3 母親 (または父親) のイメージと内的作業モデル尺度各因子の得点との相関

これらの結果から、中学生の時期においても、Ainsworth ら (Ainsworth et al. , 1978) の指摘した3つのタイプと同様の愛着スタイルが存在していることが示唆された。このことは、早期の愛着のスタイルから思春期へと連続する愛着スタイルの存在を示唆する結果であり、中学生の時期においても、乳幼児期から形成されてきた愛着スタイル、つまり内的作業モデルが、対人行動やパーソナリティの発達に影響を持っている可能性を示唆している。

### 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連

ソーシャル・スキル尺度-KISS-18のデータをもとに因子分析を行った。IT相関係数の低かった5項目を除外して、13項目として、再度、因子分析を行ったその結果、河村(1999)の結果と同様に単因子構造が確認された(Table 4)。この13項目の合計点をソーシャル・スキル得点とした。

secure得点, avoidant得点, ambivalent得点を説明変数にし, ソーシャル・スキル得点を従属変数にして重回帰分析を行った。その結果, secure得点はソーシャル・スキルの得点の有意な正の予測子であり, ambivalent得点は有意な負の予測子であることが示された。また, 影響力は小さいがavoidant得点も, 有意な正の予測子となることが示された(Table 5)。

項	目	IT相関係数
・	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	.748
・	人を助けることを上手にできますか。	.719
・	まわりの人たちのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	.704
・	物事をすすめるとき、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。	.702
・	人が話しているところに、気軽に参加できますか。	.699
・	相手から非難されたときにも、それをうまく片づけることができますか。	.682
・	あちこちから食い違った話が伝わってきても、うまく処理できますか。	.673
・	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。	.663
・	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていますか。	.646
・	知らない人ともすぐに会話が始められますか。	.642
・	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	.633
・	生活や学習の目標をたてることをあまり難しいと感じないほうですか。	.565
・	何か失敗したときに、すぐにあやまることができますか。	.477

Table 4 Kiss-18の各尺度項目のIT相関係数

この結果から, secure得点の高いタイプの内的作業モデルを持つものは, ソーシャル・スキルが高く, ambivalent得点の高いタイプの内的作業モデルを持つものは, ソーシャル・スキルが低い傾向にあることが示唆された。このことは, 内的作業モデルの傾向が中学生のソーシャル・スキルの形成または実行に影響している可能性を示唆するものである。

中学生において, ソーシャル・スキルは学校適応との関連が指摘されている(河村, 1999)。

	ソーシャル・スキル得点
secure得点	.546***
anxious得点	-.237***
avoidant得点	.133*
重相関係数	.640
決定係数	.410

\*\*\*:  $p < .001$  \*\*:  $p < .01$  \*:  $p < .05$

Table 5 ソーシャル・スキル得点への内的作業モデル  
尺度各因子の得点と重回帰分析結果

内的作業モデルの傾向が、ソーシャル・スキルの形成または実行に対して関連を持つことが示唆されたことは、個々の愛着スタイルがソーシャル・スキルを経由してして、学校適応に影響している可能性を示唆している。学校不適応への介入では、ソーシャル・スキルを改善するための働きかけと同時に、個々の愛着スタイルの改善についての働きかけも視野に入れて、その対応を考えることが必要で

あると考えられる。

Bowlby (1969, 1973, 1980) は、内的作業モデルについて、自らが経験する養育者との関係の質に応じて、自分と他者に関する一般化された期待や確信として形成されるものであり、乳幼児期、児童期といった未成熟な時期に徐々に構成され、加齢とともに可塑性を減じ、安定性を増していくものと仮定した。中学生の時期は、内的作業モデルの形成から見れば、改変可能な可塑性が残された時期とも考えられる。この時期の他者との関係が、内的作業モデルの形成に関与していることを考えると友人関係や親や周囲の大人との関わりをはじめとした他者との関係の影響をこの視点から捉え直す必要があるといえよう。いじめや対人関係の躓き、親子関係などが内的作業モデルの形成に影響を与え、ソーシャル・スキルの形成、実行の障害となり、学校適応に悪影響をおよぼすことが考えられる。また、同時にその後の対人関係やパーソナリティの発達にも影響を持つ可能性も考えられる。

しかし、逆に、可塑性が残された時期であると考えられるため、内的作業モデルの質の改変が可能であると考えられる。温かな人間関係を経験させることや信頼体験を重ねさせることで内的作業モデルの改変を導き、問題となる行動を改善するだけでなく、それらの行動を基底から支える内的作業モデル自体を改善することが可能になると考えられる。

また、行動を規定する要因として、内的作業モデルの影響を考えれば、学校現場で学校不適応や対人関係の問題などへの介入の方法として注目されてきているソーシャル・スキル・トレーニングなどにおいても、実際的な行動の変容をねらった介入とともに、それを基底から支える認知的枠組みとしての内的作業モデルの変容をねらった支援も同時に必要であるといえよう。

さらに、内的作業モデル形成には、早期の愛着対象としての母親、愛情を持って接してくれる養育者が大きな影響を持っていることを考えると、学校において対人関係の躓きや不適応行動への対策、支援を考える場合には、行動の変容を目指した本人への介入に加えて、本人が外界を良いもの、安定したものであると内在化できるように、また、自分が愛され、助けられるに値する存在として捉えられるように、家庭での本人を取り巻く環境に対して

適切な介入することが必要になってくると考えられる。

## 5 最後 に

本論文では、中学生の時期の内的作業モデルのタイプの存在を質問紙尺度によって明かにし、ソーシャル・スキルとの関連から、学校不適応などの問題行動への介入の視点を得ることを目的とした。しかし、質問紙を使用した測定では、介入の視点を得ることは実現できても、早期の愛着スタイルからの連続性や発達や変容については検討できない。今後の縦断的研究の知見の積み重ねが必要である。また、本研究の調査では、中学生の時期の内的作業モデルの存在を確かめる規模の調査にとどまったため、今後サンプル数をふやして、ソーシャル・スキルをはじめとし、自尊感情、学校生活満足度、スクール・モラル等との関わりを検討し、さらに、具体的な介入の視点を得られるようにすることが課題である。

## 引用文献

- 1) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. (1978) *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation*. Lawrence Erlbaum, New Jersey.
- 2) Bowlby, J. (1969) *Attachment and Loss: Vol. 1. Attachment*. Basic, New York
- 3) Bowlby, J. (1973) *Attachment and Loss: Vol. 2. Separation*. Basic, New York
- 4) Bowlby, J. (1980) *Attachment and Loss: Vol. 3. Loss*. New York: Basic
- 5) 河村茂雄 (1999) 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1)—学校生活満足度尺度 (Satisfaction with School Life Scale: SASLIS) (中学生用) の作成—カウンセリング研究 (印刷中) .
- 6) 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する. 川島書店.
- 7) 文部省 (1999) 学校基本調査速報.
- 8) 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) 愛着理論から見た青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.